

令和6年度 館山市立北条小学校 研究構想

はじめに

北条小は職員一人一人が教育に関しては上下の隔てなく理念を語り合うことができる学校である。とにかく自分の思ったことや疑問をぶつけて構わない。また、一人一人が分担を楽しみ、分担に生き、分担を超えて、経営に参画できる学校である。「私たちの学校は、私たちの手でつくりあげていくのだ」という北条の文化、伝統がある。これをこれからも受け継いでいきたいと考える。

1 研究と実践にあたって

(1) 北条プラン

北条小学校は、戦後まもなくから現在にいたるまで一貫して独自の教育計画「北条プラン」を持ち続けている。これは、私たちの先輩が、そして私たちが創り上げてきた独自のカリキュラムだ。その時代における「たくましく現代に生きる子ども」像を思い描き、これを達成させようとするものなのである。現在までに『北条プランⅩⅡ』が完成し、新たな北条プランに向けて動き出している。

北条教育は、時代の流れを捉えながら、「目指したい学校」「目指したい子ども」を、どう実現しているだろうかという絶え間ない研究体制と、それを支える学校教育目標（たくましく現代に生きる子どもの育成）を絶えずもち続けている。

(2) 研究と日常実践

研究者や学者の研究理念にふれ、共感することがある。しかし、いざ実践するとなると、その研究や理念をどう実践に生かしていけばよいのかわからないという場合が考えられる。一方、実践はすごいけれど、何のために、どんな考え方で…というように、研究や理念が不明瞭な場合もあるだろう。

私たちは、まず実践者である。実践なくして研究を語ることはできない。しかし、その実践を高めるためには、説得力のある研究が必要である。

実践と研究は車の両輪のようなものであり、両者があいまって前進する。北条小の研究理念は毎年のように提案されるが、それは完成しているということではない。現在の理念について日常の実践を通して理解を深めるとともに、常に新しい理念を模索していく姿勢をもっていきたいと考える。

さらに、実践する上で、日常の実践記録を集積し、分析・統合し、よりよい実践に効果的に結びつける営みがある。この営みによって、現在のプラン、あるいは理念を時代とともに修正していくのだ。このような日常実践による研究が、北条教育の柱である。

(3) あなたの香りのする実践を

北条小学校では、指導の平準化に一定の力を注いできた。「いつでも」「だれでも」できる授業づくり、学校、学年、学級経営のシステム化をめざしてきた。それが実践をオープンに話し合える風潮を形作り、その風潮を背景に、カリキュラム管理室、統合学習、オープン学習というような学校としての財産が生まれてきたのである。

しかし、これらのシステムがあることに満足するのではなく、絶えず検討、改善をする必要がある。そしてそのためには、先進的な実践が必要である。もし、先進的な実践が枯渇したのであれば、これは

北条小の教育研究・教育研修が止まるということになってしまう。そこで、北条小はあなたの香りのする実践を常に望んでいる。そのような実践が、やがて平準化されていくことで、全体のレベルアップへとつながっていく。先進的な実践→平準化、この繰り返しによって、次のプランへと進んでいく。

しかし、「先進的な実践」をすることが目的であると勘違いしてはならない。例えば、誰もが知っている実践・どの学校でも手を付けているような実践でも、“その質が高まった実践”とは何であるか考えたとき、そこにあなたの香りがあるのではないだろうか。質の高い実践→平準化、この繰り返しも目指していきたい。

いずれにせよ、我々は学び続ける教師であり続けることが何より大事なのである。

（４）「北条教育」について

どうして、「北条小教育」ではなく、「北条教育」と言われているのだろうか。

それは、本校が学校だけでなく、家庭・地域、ひいてはもっと広い範囲を視野に入れた教育を地道に進めてきたからである。

昭和 30 年代以降、本校は「たくましく現代に生きる子どもの育成」という学校教育目標を掲げ、その時代を捉えつつ、常に子どもを中心とした社会の未来像を描いたうえで教育を進めてきた。また、かつての生活教育の理念において、「教科があって、教育があるのではなく、生活があって教育があるのだ。」と謳っているように、子どもの生活を重視した教育の在り方を模索してきた。

北条教育では、現在も子ども一人一人の生活から湧き出た思いや願いを大切にしたい教育を求めている。しかし、子どもを取り巻く様々な状況が多様化してきているのは、まぎれもない事実である。そして、その渦中で生きている子ども達が見せる様々な姿に、今までの教育の成果を感じると共に、今後へ向けた課題を見つめ始めている我々教師集団がいる。

我々は今一度、子どもを取り巻く「現代」を見つめ直し、そして、そこで求められるべき「たくましさ」を追究するために必要なカリキュラムの在り方を示していくのである。

2 北条プランの歩み（研究の経過）

発行年	プラン名	特 徴	備 考
昭 33	学習展開の計画	生活コース・教科基礎コースに分かれて作成され、生活教育を掲げてきた北条教育のまとめとして出版される。	数名の職員代表によって作成。利用頻度は低かった。
昭 37	学習の組織プランⅠ	焦点教材・通過教材の区別で教材精選。 年間指導時数を実践データから27週とする。 指導方法欄に指導の知恵を記入。 (同年、関プロ放送教育)	教科主任の見識で教材の軽重を選択、全学年分を一気に書き上げる。(教科グループの何人かに相談しつつ)
昭 40	プランⅡ	初めて学習プランという名称になる。 焦点教材は、ねらい・方式を1時間毎に示す。 (市民科)(前年、全国公開「個別化と集団化」)	前回の反省に基づき、教科主任を中軸にグループで分担協議執筆。
昭 42	プランⅢ	教育目標と教科間の構造を打ち出す。 焦点教材について、焦点テストを実施。 (44年、全国公開「システム化」)	教科主任を中心に、教科グループで分担執筆。教科主任が問題作成。グループで結果分析。
昭 46	プランⅣ	現代の社会をどう見つめるかから言及し、自ら学ぶ力の育成。組織と個の関わりの中での教育の在り方を見つめる。白紙プランページを持ち、書き込みによるプランの完成を主張。	教科グループで作成。ごく短時日で脱稿。 (48年 関プロ放送)
昭 51	プランⅤ	ゆとりある教育のための教材精選、重点教材通過教材、カット教材、そしてモデル単元の展開案配置。 丸ごと人間をめざす新しい教育創造の試み。 (52年 全国公開「創造的市民の育成」)	教科グループで作成。(準備段階にザラ紙ガリ印刷のプラン草稿を作成・実践を経てまとめる。)
昭 54	プランⅥ	学校のコミュニティ化とコミュニティの学校化。 統合学習創設。 個性化学習(マルチメディア、オープンスペース、教科・統合平行プラン、マイプランタイム) 学年経営重視。	教科グループ全員と学年主任で作成。文部省指定、研究開発 52～54年の成果を生かす。
昭 62	プランⅦ	自己学習力の育成を骨格に据え、低学年教科間構造の再編成。 低学年統合の研究。 (57年、全国公開「人間化」) (前年、全国公開「自己学習力」)	教科グループで作成するが、協力員を依頼し、意見を聞いて作成。幼小関連公開・視聴覚研の実践を生かす。
平 4	プランⅧ	子ども文化の創造をめざし、子どもを見る教師の視点を変え、年間全教科全時数の指導計画を作	教科グループで作成。日常の使いやすさを優先し、毎

		成。単元丸ごと指導案形式による実践。 (元年、全国公開「子ども文化の創造」)	時間の発問。単元丸ごとの指導案の形式による研究実践を生かす。
平 12	プランⅨ	自己実現と共生の視点から全カリキュラムを眺め込む。気づき、企画し、実行し、人との感動に至る場を保障するカリキュラムをめざす。 “時の課題”を取り込む。 (平成6年、全国公開「新しい生活教育」) (平成12年、全国公開「生活力あるこどもであれ」)	教科グループで作成。日常の使いやすさを優先し、理論編と実践編に分けて編集。
平 19	プランⅩ	子どもを取りまくコミュニティの多様性(異質性・同質性)に着目し、両者の良さが存在するコミュニティの形成者(子ども異なる個性と学び合い、創造的な活動を通して自己と他者を高め合う子どもの育成)をめざした。 (平成16年、全国公開「生きることに有能な子どもを育てる」)	教科グループで作成。特に重要となる時間の活動内容を詳しく示す方式(焦点型プラン)を採用。前プラン同様理論編と実践編に分けて編集。
平 27	プランⅪ	「未来は待つものではなく、創造するものである」という考えのもと、「創時力」という研究理念を設定し、未来を自分・自分たちでつくっていく力をもつ人間を育てることをめざす。「創時力」を育むために、日々の授業の中で「受容的批判的思考力」「創造的発想力」「断行力」をどう捉え、どう子どもに身につけさせていくかを考える。 (平成27年、全国公開「創時力の育成」) (令和元年、全国公開「創時力における思考力の育成」)	教科グループで作成。理論編と実践編をA4版で発行、外国語の収録など、より使いやすく、時代に即したプランを目指し編集。
令 2	プランⅫ	子どもの学習意欲に注目し、「問題解決に向けて学びをたのしむ子どもの育成」を目指した。手立てを考える視点として、「かかわる」「つなげる」「やりぬく」という3つの柱を設定。 (令和4年、創立150周年記念行事として、全学年統合学習を展開。コロナ禍の中、来賓と保護者を招いて実施)	教科グループを年度ごとに絞って実施。3カ年で全教科・領域のプラン実践を展開。紙媒体でのプラン作成はせず、電子データ上で参照できるよう学年フォルダに保存。

3 研究テーマについて

研究テーマ

社会に生きる個性の創造

～ 第1年次 ～

(1) テーマ設定の背景

① 現代をどう見つめるか（現代観）

現代は、これまでの歴史上類を見ないほどの変化の激しい時代である。多様で複雑、曖昧さを含んで、VUCA（ブーカ）時代とも表される。世界情勢の均衡は、ロシアのウクライナ侵攻によって、瞬く間に崩れ去った。遠く離れた国で行われていることであれ、日本にとって対岸の火事ではない。日本の安全保障において、経済的にも軍事的にも注視すべき事態が続いている。

AI 技術の向上は加速度的であり、その話題をメディアで見ない日はないほどである。生産性の向上が期待される一方で、当たり前であった仕事も、AI に代替されることが予測される。AI によって一般市民の我々でもテキスト・画像・動画・音楽など、あらゆるデータを生成することができるようになった。創作活動に大きな変革をもたらしたのである。また、それらを SNS で共有し、“バズる” ことにより一躍有名になることもできるような時代である。価値観の多様化が叫ばれて久しいが、SNS の普及により、その多様性が可視化された。その一方で、見たいものだけを見る、都合のよい情報のみを鵜呑みにするなど、情報の偏りが生じ、真実を見極めることが難しい時代とも言える。ネットの情報には“フェイクニュース” が氾濫し、また都合よく“それはフェイクだ” と解釈し先導する者も現れる。多様性の理解が進んだかと言えばそうではなく、より「分断」が進んだと危惧する識者も多い。

また、解決の糸口すら見えない少子高齢化により、地方の過疎化は益々進み、今後インフラ環境の維持すら難しくなることも予想される。我々の住む安房地域においても深刻な状況が続いていくことは目に見えている。令和5年度に市から示された学校再編計画は、まさにその状況をリアルに表しており、地域をどう維持していくかという切実な問題をはらんでいる。

このような状況は、10 年前には予想もできなかったことばかりである。そのような中で、我々教員は確かな社会認識をもち、価値観をアップデートしていかなければならないと感じる。

② 子どもをどう捉えるか（子ども観）

新たに入学してきた1年生が、今流行りの動画投稿サイトで流れてくる曲を口ずさんでいる。小さな頃からスマホで好きな動画を楽しんでいる。娯楽の個別化が進み、共通の流行りが失われた。見ている世界は人によって異なるのである。人口減少、少子高齢化、共働き世帯の増加、体験の不足、コロナ禍などがそれに拍車をかける。デジタル機器の操作スキルは大きく向上した。しかし、「活用能力」「リテラシー」が向上したとは言い難い。

生身の人と人との関りが減少し、他者の気持ちや考えを理解する力は不足していると感じる。人に無関心な子が多いのではないか。よってリーダーや仕切り屋が不在である。慎重であり、間違えることを恐れ、傷付きやすい。熱量が低い（熱さを感じない）とさえ感じる。

と、ここまで書いて思った。全ては大人が予め子どもの行動を制限してしまっていることが原因ではないか。これは良い、これはダメと事細かに規定される時代を生きているのである。それは大人も

同様であろう。

そのような子ども達であるが、多様性を是とする世の中を生きていることは間違いないだろう。昔に比べて、様々な価値観が認められる社会において、子どもにもその意識は大人以上に備わっているのではないか。「こうでないといけない」「こういうものである」という固定観念が薄いため、ややもすると、それが無関心を生む。

③ 現代におけるたくましさとは何か

高度な情報化が進んだ現代においては、自分の興味・関心に対して追究していくことが益々重要となる。自分の強みを認識し、伸ばし、自己肯定感を得ていくことで、自分の人生を切り開いていくたくましさを身に付けていく必要がある。AIとの共存を図っていく一方で、人間らしさの追究という視点も重要となろう。解を提示する速度は、人間はAIにかなわなくなるであろうが、何を課題と捉えるか、どんな社会を目指すのかといった価値判断、ビジョン形成は、人間にしかできないことである。

多様性を受け入れるだけでなく、人の気持ちや考えに思いを寄せて、より良い社会を形成していくとする態度が重要である。正解のない問題に対して、最適解・納得解を導き出すためのチャレンジ精神や粘り強さが求められる。

それらの土台として、人と関わる態度やスキルの向上は、これまで以上に求められるのではないだろうか。自分の個性を発揮しながら、他者と協働的に、新たな価値を創造していくことこそ、現代に求められるたくましさであると考ええる。

(2) 研究テーマについて

① 「社会に生きる個性」とは

「個性」とは、「ある個人を特徴づけている性質・性格。その人固有の特性」とある。もともと個々人に備わったパーソナリティである。半分は遺伝的に規定されると言われるが、もう半分は環境要因により形作られていくとも言われる。一人一人の個性を大切にしたい教育が求められて久しい。その伸長を期して、指導の個別化・学習の個性化が図られることが国の教育動向によっても期待されている。

学校教育を通じて子どもが追究していくべき個性とは、未来を構想し、実現へと向かっていく社会的・創造的なものであってほしい。例えば、人前で堂々と意見を述べられる子と、それが困難な子がいる。それぞれが個性である。では、困難さを抱えている子の能力発揮の場はないのであろうか。答えは否であろう。むしろ我々教員が、その子の特性に応じて能力を発揮する場を提供し、教育活動を展開していくことで、その子に応じた学習が促進され、学びを活かす場を得て、個性を輝かせることができるのではないだろうか。私たちは子どもの個性を“好ましい”“好ましくない”と拙速に価値判断することに慎重でなければならない。子ども一人一人が自分の個性を活かせる環境をつくっていくことは、大人の責任である。自分の個性に気が付き、それが社会のために活かされると手応えを感じたとき、自己肯定感、ひいては自己有用観につながるのではないか。個人の幸福と、社会の発展の両面を追究する学習活動を目指したい。

② なぜ「創造」か

個性は元来個々人に備わっているものであり、それは遺伝的に規定される側面もあることは先述し

た通りである。であれば、もともとある個性を伸ばしていくという考え方が自然であるとの見方もあるだろう。しかし、我々が追究する学校教育の営みは、既に有る個性を伸ばすことのみならず、新たな個性に気付かせること、発見させていくことにも注力していく必要がある。それは、未だ子どもは自分の個性に無自覚であり、自分という存在に対する認識が不確かだからである。

先述した「社会に生きる個性」は、元々の得意を活かすという発想だけではない。先の例を再び用いるならば、挙手をして発表することが苦手な子が、いかにして自分自身の学びを意味のあるものにできるか。例えば文章で表して伝えるかもしれないし、イラストや動画を作成して活かすのかもしれない。それが何かの役に立つのであれば、まさに社会に生きる個性が「創造」されたと言えるのではないか。

人と違う独特な考えをする子がいる。自分の中だけで閉じてしまわず、それを表現してみると、誰かの何かの役に立つかもしれない。それも、まさに集団（社会）に対して働きかけたことで創造された個性と言えるのではないだろうか。

そのように、学校において発揮されることを目指す個性には、方法の個性や、思考の個性という2つの側面がある。そのどちらも、自分という存在を認識したり、社会を創っていったりする「創造的な営み」である。また、我々教員がそのような子どもの姿を期待し、教育活動を創造していくという意味も込めて、この語を用いるのである。

③ 「社会」をどう捉えるか

ここまで述べたうえで、改めて「社会」の捉えについて考えてみたい。

辞書的には、社会は、「ある共通項によってくくられ、他から区別される人々の集まり」とある。また、「仲間意識をもって、自らを他と区別する人々の集まり」とも記述されている。人はより良く生きるために集団を形成し、仲間意識を得て村をつくった。その延長線上に国家がある。いずれも何らかの意志のある集団である。すなわち、子どもにとっては友達同士も一つの社会であり、班・学級・学年、学校全体であったりもする。言い換えれば「コミュニティ」であり、それらには、より良くなろう、楽しくありたいという、共通意志がある。

現代観にも記したように、今日は隣人は異なる価値観をもつ他人であり、ややもすると無関心、分断が生じかねない状況にある。しかしながら、コミュニティを形成する成員として「かわり」「つながり」をもとうとすることが、社会の発展に必要不可欠であると共に、課題に対して「やりぬこう」とする意志が、学びのたのしさにつながることは、本校で取り組んできた過去の研究で確認された成果である。その土台に立ち、本研究における「社会」とは、共通意志のある集団（コミュニティ）であると捉えるのである。

発達段階に応じて、それには空間的な拡張があり、複雑化していく。各々の社会における課題を発見・認識し、成員としてその解決へ向かっていこうとする営みが、学校における重要な学習活動と言えるのではないだろうか。

4 目指す子ども像

以上、研究の方向性を示したうえで、本研究で目指す子ども像を以下のように設定する。

- ① 自分の個性を自覚し、それを活かそうとする子ども
- ② 学び合いを通して、自分の個性を磨こうとする子ども
- ③ 課題を見つけ、解決の方法を考え、社会（集団）に働きかけようとする子ども

①について

人は自分の個性に対して、往々にして無自覚である。個性を自覚するとは、自分を知ることである。他者との関わりや内省を通して、他者を知り、自分を知る。他者との能力の比較によってではなく、自分の意思で、個性を活かしていこうとする子どもを育みたい。

②について

学び合いとは、集団の中で互いの考えを伝え合い、その考えの違いを認め合う中で、自分の考えや集団の考えを発展させていく学習活動である。子ども同士だけでなく、学校では対教師、教材に向き合う中、地域との関わり等、様々な対象との学び合いがある。そのような対象に向けて、自分の個性を発揮したり、他者から学んだりしながら、個性を磨いていく子どもを育てたい。その中で、既にある個性を伸ばすだけでなく、新たな個性に気付くこともあろう。集団との関わりの中で、個性の創造を目指したい。

③について

子どもがもつ課題とは、例えば学級で起きる友達とのトラブルであったり、学校行事を成功させるための取り組みであったりと様々である。また、教科学習の中で、教材内容と向き合うことを通して得られた課題意識もある。働きかける対象となる社会（集団）は、発達段階に応じて拡がり、複雑化する。何が課題であるかを捉えることは、自分の個性を社会（集団）に活かしていこうとするうえで重要である。どうすれば解決できるかを考え、働きかけようとする中で、自分の個性が創造されることを目指す。

そのように設定する3つの目指す子ども像は、相互に関連しており、順番や段階があるものではない。3つの目指す子ども像の具現化を図ることで、研究テーマに迫っていく。

5 研究の視点

上述してきたように、社会に生きる個性は、一人で創造するものではなく、様々な対象との関わりの中でなされていくものである。目指す子ども像の具現化に向けて、以下2つの視点を踏まえて教育実践に取り組んでいく。

（1）実生活や社会（集団）にかかわる課題設定

「教科があって教育があるのではなく、生活があって教育があるのだ。」これは、戦後間もなく和泉校長が提唱した生活教育の理念であり、北条教育が大切にしてきた考え方である。今一度、その意味を本研究に照らし合わせて捉え直したい。

「先生、木って先の枝の方が細いから、右と左にはらいがあるんだね。」と、字形を実物から連想して捉える子。「玉入れで描く円を、4つ同じ大きさに描くにはどうすればいいの?」と考え、中心から同じ

距離という大事なことをもとにして、方法を考える子。「館山市の観光客が減っていて大変みたいだけど、自分にできることはないかな。」と、解決方法を考える子。どれも、実際の生活や社会から学習を進める姿である。本来学習とは、生活経験がもととなる。それらのように、自分事として捉えたとき、子どもの主体的な学習の姿が表れる。生活経験は個々に異なるからこそ、社会（集団）とかかわる学習を通して個性を発揮したり、個性が創造されたりするのではないか。講義型の一斉指導では、個性を発揮する余地がない。生活に根差し、課題を自分事として捉え、社会（集団）にかかわっていく中で、一人一人の思いや考えが醸成され、それが個性となって表れるのである。

それには、教育課程上の工夫が必要である。本校は半世紀にわたり統合学習の実践を重ねてきた。教科学習を統合で生かす。統合で身に付けた力を教科学習で生かす。そのようにして相互に関連させてきた。しかし、統合は統合、教科は教科と両者を分離してはならない。生活や文化があつての教科である。教科学習にこそ、実生活や社会（集団）にかかわる課題設定がなされるべきで、オーセンティック（真正）な学びが展開されるべきであろう。自分事として捉えられる身近な問題から始まる学びが、解決に向けた必要感を生み、真正な学びとなる。

さらに、様々な教科学習がつながり（合科・教科横断）、もはや子どもが何の教科であるかを意識せず夢中になって取り組む課題こそ、理想ではないか。先輩教師に、「教科書を学ぶのではない。教科書で学ぶのだ。」と言われた。しかし今、教科書で学びが閉じてしまつてはならないのである。よりリアリティのある学びが求められる。それが、子どもの個性を育むのだと考える。

（２）個人追究と集団追究による学習サイクル

本校における統合学習においては、個人追究型学習、集団追究型学習といった枠組みがある。その考え方を各教科・領域にも用いていく。

個人追究とは、個々の子どもの問題意識や求めをもとに、個別に追究を成立させる学習である。内省、つまり自問自答や自分との対話を通し、課題に向き合う。一方で、集団で行う学習抜きに、学校教育は成立しない。そこで重要となるのが、集団追究である。集団追究とは、学級・学年等の集団において、共通の問題について、協働的に追究していく学習である。集団のメリットを活かし、自己認識、他者理解を通して、思考の深化や知識・技能の獲得を目指していく。子どもの学習プロセスとして、意図的に個別と集団を相互に関連させていく必要がある。

相互の関連は、どのようになされるべきか。「学習は個に成立する」とは、本校の過去の研究において大切にされてきた考え方である。集団の機能を大切にしながらも、最終的には個の力が高まらなければ、追究として不十分である。では、社会に生きる個性を創造するうえで、集団をどう機能させられるか。

一口に集団といっても、様々な様相が見られる。グループ、学級、学年といった規模の大小。教師が意図的に集めたか、子どもの任意か。偶発的に発生した集団か。共通の嗜好をもった集団か、異質の集まりか。一単位時間における個別と集団のあり方は。導入は、終末は。単元全体におけるその活動の位置づけはどうか。等々、個と集団をめぐる検討事項は様々である。単純な学習形態の話に矮小化してはならない。

様々な様相の集団と、個との学習をどう織り交ぜながら学習を進めていくか。課題に対して追究する中で、個々の個性が発揮され高まる。そんな学習を展開したい。

6 研究の進め方

(1) プラン実践・検証サイクル

まず「プランⅢ」にもとづいて、授業構想を練る。次に実践し、子どもの反応から評価をする。そして修正する。実践検証を進め、次年度以降の実践者に引き継いでいく必要がある。これが Plan（計画）→Do（実践）→Check/Action（評価・改善）のプラン実践・検証サイクルである。

プランⅢ⇒⇒⇒⇒⇒ 実践・検証⇒⇒⇒⇒⇒ 修正案 2カリ・デジカリへ

【読む → 指導案作り → 学年で実践 → 反省・修正案 → 2カリ・デジカリへ】

PLAN（計画）

- ①教材研究・・・個人・研究教科グループ・学年会
 - 教科構想の理解 ○単元の価値、系統性の理論背景の検討
 - 子どもの実態把握 ○主張の確立
- ②指導案作成・・・個人（プランⅢの単元構成の理解・指導案作成）
- ③指導案検討・・・研究教科グループ（学年会でのサポート）

DO（実践）

修正、評価を充実させるため、学年全体で実践することが望ましい。その際、担当者が立てた指導案をもとにするが、クラスの実態に応じてアレンジする。

CHECK・ACT（評価・改善）

- ①参観と批評 ...参観は自由いつでもだれでも自由。参観したら必ず批評箋を渡す。
- ②実践検討と記録・・・学年会、研究教科グループで反省をし、修正案を検討する。
- ③資料の納入 ...実践者は、資料と共にカリ管に納める。（デジカリにも）

授業研の進め方

- ・一人一実践のプラン実践を行う（原則）。
- ・プラン実践は同じ研究教科グループ員は原則として参観、同学年職員もできるだけ参観し、協議会にも出席する。
- ・研究教科の実践と学年職員の実践が被った場合、どちらを優先させるかは研究教科主任と学年主任で検討のうえで判断する。同学年の実践は同日に被らないよう調整する。
- ・講師を要請する。基本は指導主事。その他の要請は要相談。

こうした取り組みをより円滑に、充実したものとするために、個々の分担や組織としてのバックアップが重要になる。そのシステムを以下に詳しく述べる。

教主（教科主任）

教科グループのリーダー。プランⅢの作成を意識し、教科構想・研究構想を練り、開発授業実践を推進する。研究教科グループや教科担当（教担）への積極的な助言を行う。そのためには、教科における自分の主張を明確に示す必要がある。過去の文献にあたったり、教科をより深く追究している人のもとへ足を運んだり、先進的な取り組みを求めたりと前向きな姿勢が要求されるのは言うまでもない。そして最も重要なことは、そんな中から自分流を生み出すこと。それが結果として「北条流」と呼ばれることになる。

研究教科グループ（教 G）

教主と共に教科の本質を探る仲間。教科における基礎・基本とは何か、そしてそれを発展させるものは何かといった理念の追究から指導法に至るまで、常に自分の型を追究していかなければならない。そして常に新しいプランについての検討を重ねて欲しいと思う。これからの動向をにらみ、開発の姿勢を常に持ち続ける。

教担（教科担任）

教主ほどとは言わないまでも、努力は必要。その中でも特に実践に力点を置く必要がある。毎日の授業がプラン実践であるとの意識で学年のメンバーをリードし、実践と評価を行う。そのために学年会で指導計画の提案を積極的に行うことが重要。

学年会

プラン実践にあたっては学年会の存在がとても重要。実践・検証を学年全体で行うことはカリキュラムの共有化＝カリ管創設のもとになった考え。学年会では指導案検討から修正まで、目の前の子どもに照らし合わせた最良の実践方法を求めるグループでありたい。日常的に授業を見せ合い、お互いに刺激し合い、助け合える仲間として学年会を考えたい。そのため、学年主任はプラン実践検証の上でもリーダーシップの発揮を期待される。

（２）研究教科

北条小では、長く全教科展開で取り組むことを続けてきた。（令和元年度まで）しかし、全教科展開で研究テーマに迫るアプローチをとったとき、そのメリット以上にデメリットが目立つようになってきた。例えば、「（研究グループ内の人数が少ないため）深まりが出ない」「（グループ数が多いため）お互いのグループで何をしているのかが見えない」「授業実践が多く、全てを参観することができない」などである。さらに、児童数減少に伴って職員数も減っていることや、ベテラン層の減少と若年層の増加により、これまでの方法で研究を進めることが難しくなってきた。

本研究においては、研究教科を絞り、今年度は【統合】【国語】【算数】の３つを研究教科とする。学年職員３人は、それぞれ３つの教科に分かれる。必ずしも教担と同じではなくてもよい。特学も３つに分かれる。その中で特学のプランも検討し、教 G として参観する。カリ管職員も３つに分かれるが、専科職員は自身の担当教科で実践をする。T2 の職員は３つのどれかで実践をする。

※R5 から特学も教 G に加わり、その中でプランの検討、参観をすることとした。理由としては、特学の視点を加えてプラン実践の検討を進めていくことや、特学の指導案を普通学級の担任が検討することで、特学と普通学級の垣根を低くしていくことを目指している。なお、特学の実践は教 G の教科に限らないが、研究の視点を同様に明記した実践をしていくこととする。

7 研究組織図

